『懐風藻』に見る『文選』の影響

――「櫻」の考察を中心に――

矢嶋　美都子

はじめに

日本最古の漢詩集『懐風藻』（七五一年？）には百二十首の漢詩が收載されているが、その中に櫻を詠じた作品が二首ある。（小島憲之校注『懐風藻』日本古典文學大系69　昭和三九年　岩波書店刊行所收、以下同じ）。

近江守采女朝臣比良夫「春日侍宴應詔」（五古）「…淑景蒼天麗、嘉氣碧空陳、葉綠園柳月、花紅山櫻春、雲間頌皇澤、日下沐芳塵、宜獻南山壽、千秋衞北辰」

長屋王「初春於作寶樓置酒」（五律）「景麗金谷室、年開積草春、松煙雙吐翠、櫻柳分含新、嶺高闇雲路、魚驚亂藻濱、激泉移舞袖、流聲韵松筠」

比良夫の詩は、春の日の天子の宴會で聖代の御世を言祝ぎ、王朝の彌榮を祈念したもので、長屋王の詩は、春の日に宴會をした自宅の作寶樓の樣子を晉の石崇の金谷園に擬えて詠じたもの。いずれの詩も春の佳き日の點景として滿開の櫻と柳を描き出している。

しかし中國の古典詩を見慣れた眼から見ると、こういった場面での「櫻」と柳の組み合わせの情景はなんとも奇異な感じを否めない。中國の古典詩において「櫻」は「櫻桃」であり、柳は『詩經』以來、春景色と別離を象徴する植物だから[1]である。さらに櫻（櫻桃）の花が詠じられるのは六朝も後期になってからだが、梅や桃（李）が壓倒的に多く詠われる蔭にかくれたような、つまりかなりマイナーな花なのである。しかし小島氏は『懐風藻』の詩人は六朝（初唐も含む）の作品、『文選』や『玉臺新詠』『藝文類聚』などから語句、詩法をさかんに學んだ、と解説（上掲書六～十五頁）しておられる。そこで本稿では、この二首の桜と柳は六朝詩歌のどのような影響を受けたものなのか、また何を象徴しているかなどについて考察するために漢魏六朝（初唐を含む）の詩文に詠じられた「櫻」（櫻桃）と『懐風藻』の「櫻」を『萬葉集』の「櫻」も含めて比較檢討してみることにする。これは古代日本人の大陸文化、文學の移入の實態の一端を解明する意義があると思われるからである。なお、「櫻」（「櫻桃」）の日本語譯「ユスラウメ」は誤解であると加納喜光氏はいう。

「櫻という漢字は、中國では櫻桃のことで、日本のさくらは櫻花（インホワ）というのです。ところがその櫻桃については、和名でユスラウメを當てるという二重の誤りがあるのです。…「櫻」は日本のサクラではなく、シナミザクラだったのです。…因みにシナミザクラが日本に渡來したのはやっと明治の初めだそうです」（『漢字の博物誌』一八九頁　大修館書店　一九九二年）。

一、中國文學における「櫻」（櫻桃）のイメージ

漢魏六朝詩文に於いて「櫻」（櫻桃）がどのように描かれているか、時代順にそのイメージを見てゆく。まず前漢の司馬相如「上林賦」（『文選』巻八）に、

於是乎…櫻桃蒲萄…羅乎後宮列于北園…揚翠葉扤紫莖發紅華垂朱榮（是に於いてか…櫻桃、蒲萄…後宮に羅り、北園に列り…翠葉を揚げ、紫莖を扤し、紅華を發き、朱榮を垂る）

ここの李善注は「櫻桃、蒲萄は「南都賦」を見よ」であり、六臣注は「『漢書』音義に櫻桃は含桃なり」という。そこで後漢の張衡の「南都賦」（『文選』巻四）をみると

若其園圃…乃有櫻、梅、山柿、侯桃、梨、栗…（其の園圃の若きには…乃ち櫻、梅、山柿、侯桃、梨、栗有り…）

ここの李善注は「『漢書』音義に櫻桃は含桃なり。郭璞の『爾雅』注に曰く梅は杏に似て實は酸い」、六臣注は「皆果名なり」。櫻は櫻桃と同義であり、含桃ともいい[2]、御苑なり御料地の園圃で栽培されている果樹と分かる。栽培される理由を傳える記事がある。

惠帝常出遊離宮、通曰古有春嘗菓、方今櫻桃孰、可獻、願陛下出、因取櫻桃獻宗廟、上許之。諸菓獻由此興（惠帝は常に離宮に出遊す、通曰く、古には春に嘗菓有り、方に今櫻桃孰せんとす、獻ず可し、願くは陛下出でて、因りて櫻桃を取り宗廟に獻ぜむ、上は之を許す。諸菓の獻は此れ由り興る）（『漢書』巻四三叔孫通傳）

顔師古の注は「『禮記』曰く仲春の月、羞むるに含桃を以てし、先ず宗廟に薦む。卽ち此れ櫻桃なり。今の所謂る朱櫻は是なり」。なお『禮記』月令の仲夏之月にこの記事はある。顔師古が仲春の月と注した譯は不明であるが、櫻（櫻桃）は天子が宗廟にお供えする果物であった。櫻（櫻桃）がお供え物に選ばれた理由について、『本草』巻三十櫻桃の集解には、

頌曰櫻桃…其木多陰先百果熟、故古人多貴之（頌曰く、櫻桃は…其の木多陰にして百果に先んじ熟す、故に古人多く之を貴ぶ）。

櫻（櫻桃）の實が百果に先んじて熟すところが木陰が多い點と共に貴ばれたからと思われる。同書は實には「朱櫻」「紫櫻」「櫻珠」等があるとも解說し、實が成熟する時期については

時珍曰櫻桃樹不甚高。春初開白花、繁英如雪、葉團有尖乃細齒。結子一枝數十顆三月熟時須守護。否則鳥食無遺也。…宗奭曰…此果三月末四月初熟（時珍曰く櫻桃の樹は甚だ高からず。春初に白花を開き、繁英雪の如し、葉は團く尖り乃ち細齒有り。子を一枝に數十顆結ぶ、三月熟す時は須く守護すべし。否なれば則ち鳥食いて遺る無きなり。…宗奭曰…此の果は三月末四月初めに熟す）。

とある。後漢の『東觀漢紀』には明帝が赤瑛の盤（お皿）で群臣に赤い櫻桃の實を下賜した記事もあり[3]、五行說で夏には赤が配されるので、櫻（櫻桃）を宗廟にお供えするのは夏とされていた、と推察される[4]。唐代の李

綽の『歳時記』は四月一日の行事と傳える。

四月一日内園薦櫻桃寢廟。薦訖班賜各有差（四月一日、内園にて櫻桃を寢廟に薦す。薦訖り班賜するに各々差有り）。

いずれにしても、前漢のころから百果に先んじて熟す櫻（櫻桃）を宗廟にお供えし、その後で臣下に下賜する習俗があった、と窺える。魏の鍾繇の「報太子書」（「太子に報ずる書」）は太子時代の曹丕に櫻桃を下賜された際の御禮の手紙であるが、その習俗を傳えている。

臣出官屬賜甘酪及櫻桃、惠厚意綢繆非言所伸（臣は官屬を出るも甘酪及び櫻桃を賜わり、厚意を惠まれ綢繆として言の伸ぶる所に非ず）

これに類する詩文には宋の江夏王劉義恭の「謝勅賜華林園櫻桃啓」（「勅して華林園の櫻桃を賜わるに謝する啓」）、梁の簡文帝の「奉答南平王康賚朱櫻詩」（「南平王康より朱櫻を賚わるに奉答する詩」）、梁の庾肩吾の「謝賚朱櫻啓（「朱櫻を賚わるに謝する啓」）等がある。當時の人々の櫻桃觀は西晉の傅咸の「粘蟬賦」から窺える。

櫻桃其爲樹則多蔭、其爲果則先熟。故種之于廳事之前。時以盛暑、逍遊其下、有蟬鳴焉…（櫻桃の其の樹爲るは則ち多蔭、其の果爲るは則ち先に熟す。故に之を廳事の前に種う。時に盛暑を以て、其の下を逍遊すれば、蟬の鳴く有り。…）

櫻桃の木は夏の暑さを防ぐ木陰を提供し、實は百果に先んじて熟すので官廳の庭先に植えられている、というのである。ちなみに『初學記』（卷二八）の引く「洛陽宮殿簿」には「顯陽殿前には櫻桃六株、徽音殿前と乾元殿前には竝に二株」とあり、『晉宮閣名』には「式乾殿前には櫻桃二株、含章殿前には櫻桃一株、華林園には櫻桃二百七十株」とある。西晉の左思の「蜀都賦」（『文選』卷四）は櫻（櫻桃）の實「朱櫻」の赤さに着目している。

其園…百果甲宅、異色同榮、朱櫻春熟、素柰夏成（其の園には…百果甲宅し、色を異にし榮を同じくし、朱櫻は春熟し、素柰は夏成る）

李善注は「周易に曰く百果草木、皆甲坼す…」。甲は皮、宅は坼と同じで開く、裂ける意味。左思と同じころの潘岳の「閑居賦」（『文選』卷十六）にも櫻桃が詠出されている。

爰定我居、築室穿池、…三桃表櫻胡之別、二柰曜丹白之色（爰に我が居を定め、室を築き池を穿つ、…三桃は櫻胡の別を表し、二柰は丹白の色を曜かす）

六臣注は「三桃は侯桃、櫻桃、胡桃なり」。桃ではないが「桃」の字を含み持つ果實の名稱に着目した言葉遊び的な表現といえる。

宋の鮑照の「三日」詩（詩の引用は以下『先秦漢魏晉南北朝詩』逯欽立輯校　中華書局出版　一九八三年を底本とする）でも實が詠われている。

鳧雛掇苦薺、黃鳥銜櫻梅（鳧雛は苦薺を掇り、黃鳥は櫻梅を銜む）

「黃鳥銜櫻梅」の句の注に錢仲聯は先の張衡の「南都賦」「乃有櫻、梅、山柿」を李善注もそのままに引いている（『鮑參軍集注』錢仲聯增補集說校

上海古籍出版社　一九八〇年）。「櫻梅」という植物はなく、「梅」を配したのは押韻の關係と思われる。

齊の謝眺の「聯句　紀功曹中園」（聯句「紀功曹の中園」）も實を詠う。

丹纓（本集は櫻に作る、本集に從う）猶照樹、綠筠方解籜、（丹纓（櫻）猶お樹を照らし、綠筠方に籜を解とかんとす、）

櫻桃の赤い實が艶やかに樹に照り映える様子と綠竹の籜（竹の子の皮）が落ちそうな様子を初夏の點景として對比させた。この對句は北周の庾信が上手に換骨奪胎している。「陪駕幸終南山和宇文内史詩」（陪駕して終南山に幸し宇文内史の詩に和す）詩に

…新蒲節轉促、短筍籜猶重、樹宿含櫻鳥、花留釀蜜蜂…（新蒲の節は轉た促がし、短筍の籜は猶お重る、樹に宿すは櫻を含む鳥、花に留るは蜜を釀す蜂）

陳の江總の「攝官梁小廟」（「梁の小廟に攝官する」）詩も櫻（櫻桃）の實を詠う。

疇昔遊衣所、今日薦櫻時、…虛簷靜暮雀、洞戸映光糸、平生復能幾、語事必傷悲（疇昔遊衣の所、今日櫻を薦する時、…虛簷に暮雀靜かに、洞戸に光糸映ず、平生復た能く幾ばくぞ、事を語れば必ず傷み悲しむ）

詩題の注に「詩紀に云う、梁に小廟有り、太祖太夫人の廟なり、嫡に非ざる故に別に廟を立つ、と。南史曰く、侯景建鄴を寇し、詔して總權を以て太常卿を兼ねて小廟を守らしむ」とある。梁朝滅亡後に成った陳朝

でも、櫻桃を宗廟にお供えする行事が續けられていたことを傳える詩だが、この詩の櫻（櫻桃）は寂れて蜘蛛の巣が張り、夕暮れの雀がいるだけの小廟にお供えするという、亡國の悲哀を改めて想起させる物として描かれている。

西魏の傀儡王朝である後梁の宣帝（蕭詧、昭明太子の第三子）の「櫻桃賦」では

惟櫻桃之爲樹、先百果而含榮…鳥纔食而便墮、雨薄灑而皆零、未覩紅顏之實、空有薦廟之名、…且得蔽乎羲赫、實當暑之淒清」（惟れ櫻桃の樹爲るや、百果に先んじて榮を含み、…鳥纔に食らえば便ち墮ち、雨薄く灑げば皆零つ、未だ紅顏の實を覩ざるに、空しく薦廟の名有り、…且つ羲赫を蔽うを得れば、實に暑に當たるも之に淒清なり）

この櫻桃觀は西晉の傅咸の「粘蟬賦」と基本的に同じだが、薦廟の果實という名聲がある、と指摘する點が櫻桃のイメージを明確にしている。

櫻桃の實を薦廟する行事は唐代に繼承され、太宗の「賦得櫻桃春字韻」（「櫻桃を賦し得たり　春の字の韻」（『全唐詩』中華書局出版　一九九六年を底本とする）では、お下がりを樂しむ宴會の様子が詠われている。

華林滿芳景、洛陽遍陽春…昔作園中實、今來席上珍（華林に芳景滿ち、洛陽に陽春遍し…昔は園中の實と作るも、今は來りて席上の珍たり）

櫻桃は薦廟の果物というイメージは唐の王維の「勅賜百官櫻桃」（「勅して賜百官に櫻桃を賜う」）詩でかなり決定的になり、華やかな宮廷行事を象徴するものになった。

芙蓉闕下會千官　　芙蓉闕下千官を會し
紫禁朱櫻出上蘭　　紫禁の朱櫻上蘭を出づ
總是寢園春薦後　　總て是れ寢園春薦の後
非關御苑鳥銜殘　　關するに非ず御苑の鳥銜み殘すに
歸鞍競帶青糸籠　　歸鞍競って帶ぶ青糸の籠
中使頻傾赤玉盤　　中使頻りに傾く赤玉の盤
飽食不須愁內熱　　飽くまで食いて須いず內熱を愁うるを
大官還有蔗漿寒　　大官還って蔗漿の寒有り

王維の詩に和した崔興宗の「和王維勅賜百官櫻桃」（「王維の勅して百官に櫻桃を賜うに和す」）詩も殘っている。官を辭して蜀を放浪中の杜甫にとっては朱櫻は宮中にいたころや都長安を回想するよすがであった。「野人送朱櫻」（「野人朱櫻を送る」）に、

憶昨賜霑門下省　　憶う昨　賜霑す門下省
退朝擎出大明宮　　退朝　擎出す大明宮

以上、漢代のころから、櫻（櫻桃）は百果の最初に熟し宗廟のお供えにする赤い實と認識され、六朝の詩人はその實（櫻、櫻桃、含桃、朱櫻等の語彙）と葉（夏の木陰用）を詠じる對象としていた。この見方，詩材としての捉え方は唐代まで踏襲され、櫻（櫻桃）の實は宮廷行事を象徵する晴れやかな果實のイメージになった。一方、櫻（櫻桃）の花は殆ど顧みられなかったが、その中でも興味深い一定の詠われ型が見出されるので、次に考察する。

二、中國古典詩に詠じられた櫻（櫻桃）の花

櫻（櫻桃）の花は、西晉の張華の「櫻桃含紅蕚」（櫻桃紅蕚を含む）の句が詩題も無く一句だけ記載されてあるのが最初の詠出例。次に宋の王僧達の「詩」[5]は

初櫻動時艶、擅藻灼輝芳、緗葉未開蕋、紅葩已發光（初櫻時艶を動かし、藻を擅いままにして輝芳を灼かす、緗葉未だ蕋を開かざるに、紅葩已に光を發す）

淺黃色の葉のなかで蕋はまだ開いてないのに紅葩（美しい赤い花）はもう艶やかに光っている、という春の極めて早い時期の櫻桃の葉と花（蕾）を詠じたもの。次に民歌であるが梁の武帝の「子夜四時歌　夏歌」（『玉臺新詠』卷十）に

含桃花落日、黃鳥營飛時、君住馬已疲、妾去蠶欲飢（含桃の花落つる日、黃鳥飛ぶを營む時、君住まれ馬已に疲る、妾は去らん蠶飢えんと欲す）

含桃（櫻桃）の花が散る日、と花を表現している。しかし花が散れば實が成り、黃鳥は先引例からも櫻桃の實を含む鳥なので、實は「妾」を黃鳥は「君」を暗示する。つまり後半の二句を連想させる「興」のような修辭法で描かれた花といえよう。櫻桃の花の美しさの發見は梁の沈約の「早發定山」（「早に定山を發す」）詩（『文選』卷二七）を嚆矢とする。

夙齡愛遠壑、晚涖見奇山…野棠開未落、山櫻發欲然、忘歸屬蘭杜、

懐祿寄芳荃、眷言採三秀、徘徊望九仙（夙齡より遠壑を愛し、晩涖により奇山を見る…野棠は開いて未だ落ちず、山櫻は發いて然えんと欲す、歸るを忘れて蘭杜に屬け、祿を懐いて芳荃に寄す、眷て言に三秀を採り、徘徊して九仙を望む）

野棠、山櫻の句の六臣注は「棠、櫻は皆果木の名。各々其の花を開き、發するなり、花の朱色は火の然えんと欲するが如くなり」。李善注は無い。山櫻は山中に咲く櫻桃の花。野棠は野邊のやまなし。この句のお手本は宋の謝靈運の「酬從弟惠連」（「從弟惠連に酬ゆ」『文選』巻二五）詩の「山桃發紅萼、野蕨漸紫苞…」（山桃は紅萼を發き、野蕨は紫苞を漸む）である。「山桃」と「野蕨」を對句し、山中に咲く桃の紅い花を印象的に詠じた。沈約は「山櫻」と「野棠」を對句にして、山中の櫻桃の花は咲いて燃えだしそうだ、とした。櫻桃の花は先引の『本草』に「春初に白花を開き、繁英雪の如し」とあるが、火が燃えあがる直前の白煙が立ち込めている様子、或いは太陽の傾き加減で朱色、淡紅色に見える場合もあるので、矛盾しない。神仙世界を思わすような奇山の中で滿開に盛大に咲いている様子を表現したのである。沈約のこの「山櫻」の表現は以後の櫻桃の花を詠じる模範となる。

梁の蕭瑱の「春日貽劉孝綽」（「春日劉孝綽に貽る」）詩では

澗水初流碧、山櫻早發紅（澗水初めて碧を流し、山櫻早に紅を發く）、

陳の江總の「春日」詩は、夕陽を帶びた山櫻を描く

水苔宜溜色、山櫻助落暉（水苔は溜色に宜しく、山櫻は落暉を助く）、

隋の煬帝の「宴東堂」（「東堂に宴す」）詩も、夕陽の中の山櫻を詠う。

雨罷春光潤、日落暝霞暉、海榴舒欲盡、山櫻開未飛…（雨罷み春光潤い、日落ちて暝霞暉く、海榴舒びて盡きんと欲し、山櫻開いて未だ飛ばず…）

海榴は石榴、つばき。唐の王維の「遊感化寺」（「感化寺に遊ぶ」）詩では

…谷靜惟松響、山深無鳥聲…繞籬生野蕨、空館發山櫻…（谷靜かに惟だ松の響きあり、山深く鳥聲無し…繞れる籬に野蕨生じ、空館に山櫻發く…）

趙殿成は「野蕨」に謝靈運の「野蕨漸紫苞」を注している（『王右丞集箋注』趙殿成箋注　中華書局出版　一九七二年）。しかし詩中に山の字を二度使うのは意圖的と見るべきで、この野蕨と山櫻の對句は、押韻の關係もあるが、やはり沈約の山櫻の對句を充分に意識している。王維の「送錢少府還藍田」（「錢少府の藍田に還るを送る」）詩では

每候山櫻發、時同海燕歸（每に山櫻の發くを候い、時に海燕の歸るに同ず）

とあり、趙殿成は山櫻に沈約の「山櫻發欲然」の句を注している。

以上、櫻（櫻桃）の花は「山櫻」の語で表現され、用例は少ないが、その表現法はかなり定型化されている、といえよう。沈約は實際の山中の櫻（櫻桃）の樹を「山櫻」といい、「山櫻」に花が咲く情景を詠じたのであるが、隋の煬帝の詩では宮殿の東堂の櫻桃の花を「山櫻」と表現している。「山櫻」の語が櫻（櫻桃）の花を意味するようになった證左である。なお、櫻（櫻桃）の花がその美しさを含めて様々に詠われるのは、白樂天

とその周圍の詩人の作品に於いてであり、「櫻桃花」の語例も出現するが、時間的に『懷風藻』の詩人への影響は考えられないので省略する。

三、『懷風藻』に詠出された「櫻」について

一、二で考察した「櫻」（櫻桃）はシナミザクラという植物で、中國文學では「櫻」（櫻桃）はその實を意味し、「山櫻」は「櫻」（櫻桃）の花を意味する、と認識した上で『懷風藻』の比良夫の「春日侍宴應詔」の「葉綠園柳月、花紅山櫻春」と長屋王の「初春於作寶樓置酒」の「松煙雙吐翠、櫻柳分含新」の句を檢討してみよう。まず、長屋王の作品についてであるが、同一年かは不明だが場所と季節が共通する長屋王の佐保の邸宅（作寶樓）での五首の作品群がある。

境部王「宴長王宅」（「長王の宅にて宴す」）は

送雪梅花笑、含霞竹葉清（送雪を送りて梅花笑い、霞を含みて竹葉清し）

＊百濟公和麻呂「初春於左僕射長王宅讌」（「初春に左僕射長王が宅に於いて讌す」）には

芳梅含雪散、嫩柳帶風斜（芳梅雪を含みて散じ、嫩柳風を帶びて斜く）

＊箭集宿禰蟲麻呂「於左僕射長王宅宴」（「左僕射長王が宅に於いて宴す」）には

柳條未吐綠、梅蕊已芳裾（柳條未だ綠を吐かざるも、梅蕊已に裾に芳し）

＊大津連首「春日於左僕射長王宅宴」（「春日左僕射長王が宅に於いて宴す」）には

庭梅已含笑、門柳未成眉（庭梅已に笑を含めども、門柳未だ眉を成さず）

＊鹽屋連古麻呂「春日於左僕射長王宅宴」（「春日左僕射長王が宅に於いて宴す」）には

柳條風未煖、梅花雪猶寒（柳條の風未だ煖かならず、梅花の雪猶お寒し）

これら五首のすべてに「梅」が詠われ、境部王の作が「竹」と對句にする以外は「柳」との對句になっている。境部王が梅の對に竹を詠じたのは、前漢の梁孝王は兔園を築き文人を集めて文學サロンを開いたことで有名だが、その園庭には竹を多く植えた「修竹園」があったので、長屋王の宅を「修竹園」に見立てた表現と思われる。また東晉の王徽之が竹を指して「何ぞ一日も此の君無かるべけんや」といった故事（『世說新語』任誕）も意識しよう。次に比良夫の「春日侍宴應詔」と類題の作品は十二例ある。

＊紀朝臣麻呂「春日應詔」

階梅鬪素蝶、塘柳掃芳塵（階梅素蝶に鬪い、塘柳芳塵を掃う）

巨勢朝臣多益須「春日應詔」二首

松風催雅曲、鶯哢添談論（松風雅曲を催し、鶯哢談論に添う）、

岫室開明鏡、松殿浮翠烟（岫室明鏡を開き、松殿翠烟浮ぶ）

＊美努連淨麻呂「春日應詔」

階前桃花映、塘上柳條新、輕烟松心入、囀鳥葉裡陳（階前に桃花映え、塘上に柳條新し、輕烟松心に入り、囀鳥葉裡に陳く）

大石王「侍宴應詔」

淑氣浮高閣、梅花灼景春（淑氣高閣に浮び、梅花景春に灼く）

藤原朝臣史「春日侍宴應詔」

春日歡春鳥、蘭生折蘭人（春日春を歡ぶ鳥、蘭生蘭を折る人）

田邊史百枝「春苑應詔」

松風韻添詠、梅花薫帶身（松風の韻詠に添え、梅花の薫身に帶ぶ）

大伴宿禰旅人「初春侍宴」

梅雪亂殘岸、煙霞接早春（梅雪殘岸に亂れ、煙霞早春に接す）

＊安部朝臣廣庭「春日侍宴」

花舒桃苑香、草秀蘭筵新、堤上飄糸柳、波中浮錦鱗（花舒きて桃苑香しく、草秀でて蘭筵新し、堤上糸柳飄り、波中錦鱗浮ぶ）

＊刀利康嗣「侍宴」

金堤拂弱柳、玉沼泛輕鱗…日落松影闇、風和花氣新（金堤弱柳拂い、玉沼輕鱗泛ぶ…日落ち松影闇く、風和ぎて花氣新し）

＊長屋王「元日宴應詔」

玄圃梅已故、紫庭桃欲新、柳糸入歌曲、蘭香染舞巾（玄圃梅已に故り、紫庭桃新ならんと欲す、柳糸歌曲に入り、蘭香舞巾に染む）

＊藤原朝臣總前「侍宴」

花樹開一嶺、糸柳飄三春（花樹一嶺に開き、糸柳三春に飄る）

梅は五例で柳との對句は一例。桃は三例ですべて柳と共に詠われている。松は四例、蘭は一例（蘭筵、蘭香の蘭は一種の美稱）である。因みに『懷風藻』には合計で梅は十三、桃は七、柳は柳絮、楊樹を含めて十五詠出例がある。これらの植物が詠出された背景を考察するに、梅や桃の花は中國文學でも春日に相應しい花である。蘭は『楚辭』以來、香り高い香草であることから立派な君子、氣品の高さを象徴するのでで、おめでたい宴席での作に相應しい。さて、問題は、櫻と柳と松である。中國文學では、松は葉が綠色を變えないところから、節操を守る人や隱逸世界（神仙世界卽ち不老長生も含む）の象徴というイメージの強い植物なので、朝廷の春日の宴席で何を象徴する意圖なのか、櫻、柳とともに不思議な感じがする。視點を變えて考えるに、當時の日本人に、これらの植物に對する固有のイメージがあったのではないかと推察される。そこで主に『萬葉集』の植物のイメージ、由來を詳細してある山田宗睦氏の『花　古事記　植物の日本誌』（八坂書房出版　一九八九年）を見ると、まず松の項（一五二頁）に

「松がタタリ木であり、年占いにかかわるということは、松によりくる神の性格についても、一つの結論を示すのである。すなわち松は年神のよりくる木だったのである。」

とある。年神様の影向の松とみれば、めでたい春日の宴席に相應しい植物といえる。同書のヤナギの項（三三八頁～三四六頁）には

「萬葉集にヤナギをうたったのは三七首ある。…たしかに記紀や風土記にはヤナギは出てこない。この點からいうと、ヤナギは比較的新しい渡來植物だったのは、ほぼまちがいない。萬葉集中のヤナギの歌のうち、ウメと對によんだものが多いのは、ともに當時渡來した植物への新たなる知識、美意識を踏まえたものであろうか。」

これによれば、長屋王の宅での作品にそろって柳と梅の對句が詠出された理由も納得できる。サロンで新來の渡來種の梅と柳への新知識、美意識を披露しあった、と十分に想像できるからである。同書のヤナギの項では、さらに柳と櫻の共通點を擧げている。

「ヤナギが插し木としてよく根づくというその性質が、たちまち新年のイネの豐饒の豫祝につかわれたのが、まずヤナギの最初の效用であったろう。豫祝の木は、ヤナギ渡來以前に、列島自生のヤマザクラその他があったが、その習俗に新來のヤナギはまずもってぴったりと適合したのである。」

柳も櫻もイネの豐饒を豫祝する木と認識されていたのである。そうであれば、これもまたおめでたい春の日の宴席での作に相應しい植物と分かる。同書のサクラの項には、

「サクラが、いつからカザシになったかはわからない。しかし、山櫻は、この列島に自生の植物だったから、萬葉以前かなりさかのぼると考えていいであろう。…サクラの美意識の一つは、このカザシ、つまりは咲くほどによい（豐饒を豫祝する）花である。…萬葉にサクラをうたった歌は四〇首ある。…もうひとつサクラについて萬葉集がしめすのは、これが戀する女性のシンボルであったということである」（一七六頁～一八四頁）

とある。カザシは頭插、髮飾り。これらから、長屋王の詩に松、櫻、柳が詠い込まれているのは、サロンの主宰者として新味を出す意圖はもちろんだが、王として稻作文化日本の基盤であるイネの豐饒を豫祝した、と考えられる。問題は比良夫の「花紅山櫻春」の句である。比良夫が柳と櫻を詠い込んだ理由は、やはりおめでたい宴席での豐饒の豫祝のためと推察できるが、文學的行為として「山櫻」の語は日本に自生しているヤマザクラを意味するのか、沈約の「山櫻發欲然」の句から發展した中國文學の櫻（櫻桃）の花の美しさの表現法の影響を受けたものなのか、判斷に迷うところである。それで當時のサクラの表記を確認するために『萬葉集』卷八（新日本古典文學大系2所收　岩波書店出版　二〇〇〇年）をみると、まず若宮年魚麻呂（傳不詳）の「櫻花歌」がある。

１４２９　國のはたてに　咲きにける　櫻の花の　にほひはもあなに（國乃波多弖爾　開爾鷄類　櫻花能　丹穗日波母安奈爾）

ここでは「櫻の花」を萬葉假名で「櫻花」と表記している。ちなみに他例では、

１４２５　あしひきの山櫻花日竝べて（足比奇乃　山櫻花　日竝而、卷八）

１４４０　高圓の山の櫻はいかにかあるらむ（高圓　山能櫻者　何如有良武　卷八）

１８６４　あしひきの山の間照らす櫻花（足日木之　山間照　櫻花卷十）

１８６７　阿保山の櫻の花は今日もかも（阿保山之　佐案花者　今日毛鴨　卷十）

１８８７　佐紀山に咲ける櫻の花の見ゆべく（佐紀山爾　開有櫻之花乃可見　卷十）

「山櫻花」は山に咲いている櫻の花、「高圓　山能櫻」は高圓山の山の櫻（花が咲き始めるか、散るか解釋は分かれているが花が想像されている）、「佐案花」はサクラの花（表記に櫻の字が使われない例、一本に「佐宿木花」に作る）、「櫻之花」は櫻の花。これらから、萬葉の詩人は、櫻（サクラ）には花の字を付すのが通例で、無くても櫻といえば櫻の花を想定しており、それが山に咲く場合は「山櫻花」「山能櫻」と律儀に山の字を冠していた、と窺える。こうみてくると長屋王の「櫻柳分含新」の句は日本的な發想から「櫻の花」を表現したものと了解できる。しかし比良夫の「山櫻」は日本的な表現習慣からみれば「山の櫻の花」の意味になり、どうも落ち着かない。そこで對になっている「葉綠園柳月」の句を考察するに、「園柳」の語は、宋の謝靈運の「登池上樓」（『文選』卷二二）に

春草生池塘、園柳變鳴禽（春草池塘に生じ、園柳鳴禽を變ず）

また「古詩十九首　其二」（『文選』巻二七）に

青青河畔草、鬱鬱園中柳（青青たり河畔の草、鬱鬱たり園中の柳）

とある。「園中に月が出ている」というは、魏の劉楨の「公讌」（『文選』巻二十）詩に

月出照園中、珍木鬱蒼蒼（月出で園中を照らし、珍木鬱として蒼蒼たり）、

梁の江淹の「雜體詩　魏文帝遊宴」（『文選』巻三一）詩に

月出照園中、冠珮相追隨（月出で園中を照らし、冠珮相い追隨す）

とある。更に「柳が緑」だというのは謝靈運の「從游京口北固應詔」（『文選』巻二二）に

原隰荑緑柳、墟囿散紅桃（原隰には緑柳荑み、墟囿には紅桃散ず）

とある。作品の背景や詠われた狀況は勘案せずに、これらの詩の語句、語彙を混ぜ合わせた句といえよう。すべて『文選』からの引用だが、＊印を付した他の懷風藻の詩人の柳の句と比較しても大變凝った用い方である。對句の片方がこれだけ『文選』を參考にしていることから、「花紅山櫻春」の句も同樣と推察される。『文選』の中に「櫻」の字が表記された詩句章句で花を表現する例は、先引の沈約の「山櫻發欲然」一例だけであるが、「花紅」は、先引の司馬相如の「上林賦」に「櫻桃…紅華を發く」、とあり沈約がお手本にした謝靈運の「山桃は紅萼を發く」の句もある。或いは比良夫は七百年前後に活躍した人なので、隋の煬帝の「東堂に宴す」詩の「山櫻開未飛」の句や梁の蕭瑱の「山櫻早發紅」の句を見ていた可能性もある。なお『藝文類聚』の櫻桃の項は「實」についての例であり、『玉台新詠』には「櫻」の用例は無く、先引の梁の武帝の作品の花は「含桃花」である。つまり比良夫は日本の櫻の花を詠じるのに、その語彙に一例ではあるが『文選』に用例の有る「櫻」の字で花を意味する「山櫻」の語とこれに關連ある表現を用いた、と考えられるのである。

結び

古代日本の近江、奈良朝廷は、中國から樣々な文化、文物を移入しそれを吸收、學習した。その一つが漢詩を作ることで、當時の最高の知的水準を示す榮譽有る行為であった。彼らの最初の成果が『懷風藻』である。詠う內容も表現法も『文選』や『玉台新詠』『藝文類聚』に倣った作品が大半で、千篇一律と評され、花といえば「梅」で、柳と共に最新知識を披露する競演のように詠じられている。梅や柳は關連の文獻と共に渡來した新しい植物だったからである。その中で注目されるのが本稿で考察した二首の柳とともに「櫻」を詠い込めた詩である。櫻は日本に自生する植物で、櫻の花は稻作文化日本において稻の豐饒を豫祝する花という既存のイメージがあった。中國の櫻（櫻桃）自體は渡來しなかったが、渡來した文獻『文選』には、「櫻」（櫻桃）の字の表記例があり、櫻桃の實を表現した例が殆どだが、花を表現する「山櫻」の語もあった。しかし中國で主流の櫻（櫻桃）に對する見方、百果の最初に熟す赤い果實であるこ

とや、葉が夏の木陰に役立つこと、薦廟の行事等文獻からの情報が顧慮された形跡は無い。一方、柳は文獻と實物が渡來したのだが、中國文學で柳に付隨していた「別離」のイメージは全く無視され、「春景色」のイメージの面に、插し木としてよく付くところから新年の稻の豐饒を豫祝する木のイメージが付加された。つまり櫻（櫻桃）は花を意味する「山櫻」の語のみが、柳はイメージが日本的なものに變容して詩材となっているのである。以上のことから、この櫻と柳の詩は、固有の文化、習俗に合わせながら中國の文物を取り入れてきたという古代日本人の外來文化受容の一端を示していると結論できると思う。

注

① 柳のイメージついては拙稿「柳のイメージの變遷」（矢嶋美都子著『庾信研究』明治書院出版　平成十二年　外篇第二節二八八頁～三〇三頁に所收）で考察してある。

② 含桃の語釋は『本草』卷三十櫻桃に「釋名　鬻桃、含桃、荊桃。宗奭曰孟詵本草、言此乃櫻非桃也。雖非桃類以其形肖桃、故曰櫻桃、又何疑焉…禮記仲春天子以含桃薦宗廟卽此、時珍曰其可顆如瓔珠故謂之櫻。而許愼作鬻桃云、鬻所含食故又曰含桃亦通…。」

③ 『東觀漢紀』に「明帝宴群臣大臣、進櫻桃以赤瑛盤賜群臣、月下視之盤與櫻桃同色　群臣皆笑云是空盤」。

④ 櫻桃の實については、郊廟歌辭の夏、赤帝の箇所で齊「雩祭歌赤帝」「靡草云黃含桃實」、隋「五郊歌赤帝歌」「…含櫻薦實、木槿垂蕤」、唐「赤帝徵音」「含桃可薦芬馥」、また「晉宋齊辭、子夜歌　夏歌」に「含桃已中食、郎贈合歡扇」、隋の「雜曲歌辭　陽春曲」には「芣苡生前逕、含桃落小園」と詠われている。

⑤ 詩題について丁福保の『全漢三國晉南北朝詩』は「朱櫻」とする。なお『初學記』卷二八櫻桃の項は、この詩の櫻を鶯に、蕋を蕚に作る。

（亞細亞大學教授）